

国際放射シンポジウム/国際放射委員会の報告*

高島 勉^{*1}・山内 恭^{*2}・中島 映至^{*3}

1. 1992年国際放射シンポジウムと国際放射委員会

国際放射シンポジウムは4年に1度の開催で、1992年8月にはエストニアのタリン市で開催された。開催にいたるまでには、ソ連邦の解体というハプニングがあり、代替案も考慮しなければならない時期もあったが、盛況に終了した事は誠に嬉しい事であった。特にエストニアの研究者の尽力には感謝します。

シンポジウムは、これまでの研究の進捗状況、現在の研究課題、将来の問題点等を討議・情報交換する場である。今回は特に、(1)雲と放射との相互作用、(2)気候における放射と力学の役割、(3)大気および地表面のリモートセンシング、(4)大気放射の基本的諸問題、の4つのテーマについて研究発表および討議がこれまで通り単一のセッションで実施された。初めて東欧で開催されたシンポジウムで、東欧からの若い研究者の参加が目立ち、約290に近い論文発表がある予定であったので、発表構成も口頭発表、ポスター発表を適当に織り混ぜたところに特徴があった。実際にはキャンセルがあり、参加者は150~200名程度と思われる。一人4ページの論文は、A. Deepak 出版社から1993年8月に出版された。

シンポジウムでは、高齢のKaplan先生が「衛星による大気観測の将来」という演題で発表されたが、主として初期の頃の苦労話であった。また、偏光に関する発表が数件あった。ピナツボ火山爆発に伴う研究発表は火山の鎮静状態のため、数件にとどまった。噴煙の粒径分布(2つの極大値がある)や屈折率を求めたものもあった。

学会開催中に国際放射委員会が2回開かれ、それぞれ約15名の参加があった。様々なワークショップの進捗状況の報告に加えて、J. London先生からは大気放射学会の歴史について編集集中で来年には完成させたいとの報告があり、については貴重な写真等があればお借りしたいとのことであった。大気ガスに関する研究では、波長3~20 μm 、分解能0.1~0.5 cm^{-1} で理論計算の比較を研究する事、GEWEX(全球エネルギー水循環実験計画)に関連して、現在理論家が多いが、実験観測も大切にしなければならない事、ISCCP(国際衛星雲気候計画)に関連して、地表面放射収支、雲の同定、極域の放射、データ精度の検証等に力を入れている事が報告された。その他、ASA(大気スペクトル応用)、IGAC(大気化学プログラム)、IGAP(全球エアロゾルプログラム)の進捗状況の報告があり、新しいワーキンググループとして、トレースガスに関連してオゾンの役割を調査するグループの提案があった。今回の開催地については、米国東海岸Williamsburg市が立候補しているが、夏は気候が悪く、最適時期について検討する事になっている。委員については、ワークショップや座長等の担当を通して学会に貢献できる人、様々な分野や地域にまたがる人という事で検討されてきた。これまで気象研究所の高島が2期、極地研究所の山内氏が1期勤めてきたが、今回高島に替わって東京大学の中島氏が委員として推薦された。近年リモートセンシングの分野で日本の活躍が目立っているが、その割には委員の少ない事が指摘された。

(高島 勉)

2. 1993年 IAMAP 国際放射委員会

国際放射委員会(IRC) ビジネスミーティングが、1993年7月13日夕方、IAMAP-IAHS '93 Yokohamaの会場内にて約15名の出席で開かれた。IRCとは、IAMAP 専門委員会の1つで大気放射学の問題をより専門的に論議し、国際的な共同研究の立案・調整等を

* Report on the International Radiation Symposium and International Radiation Commission.

^{*1} Tsutomu Takashima, 気象研究所.

^{*2} Takashi Yamanouchi, 国立極地研究所.

^{*3} Teruyuki Nakajima, 東京大学気候システム研究センター.

行なうための組織である。最近では、WCRPに関連し、ISCCP や BSRN (地上放射収支ネットワーク) 推進のために活動している。1992年夏、エストニア (旧ソ連) タリン市で開かれた国際放射シンポジウムの際に委員長は8年間勤めたフランスの J. Lenoble からイギリスの J. E. Harries (Rutherford Appleton Lab.) に交替、副委員長はアメリカの W. L. Smith (U. Wisconsin), 書記はフランスの A. Chedin (LMD/Ecole Polytechnique) である。

IRC の中には種々のテーマに対応した“Clouds and Radiation”, “ISCCP”, “WCRP WG on Radiation Fluxes”等の作業委員会 (WG) が作られており、まずこれらの活動報告がなされた。雲と放射が依然主要テーマであり、ISCCP での雲量再評価、94 GHz 雲レーダ、気候モデルへの雲の取り込み方等の話が紹介された。“高分解能リモートセンシング”という新しいWGを作ってはとの提案に対しては、WGは既に十幾つと多すぎるので、まず統廃合して整理してからということになった。

次期 (1996年) 国際放射シンポジウムの開催地としては、アラスカのフェアバンクス市 (アラスカ大学地球物理研究所) が手を挙げており、“北極気候システム

研究 (ACSYS)”等極域研究の高まりの中で、海水と放射、極域の雲分布 (ISCCP 関連)、極域成層圏雲 (PSCs) 等の問題に焦点を当てるのにふさわしい場所との支持の声が出た。しかし、未だ米国のバージニア州ウィリアムズバーグ市 (NASA Langley 研究所が発案) という提案も残っているとのこと。

1995年の IUGG (米国のコロラド州ボルダー市開催) で IRC として主催、共催するシンポジウムの案 (スペクトロスコーピー、雲とエアロゾル、ISCCP の検証、地表面放射収支、紫外線モニタリング、新しい観測法、等) が出された他、IRC としての活動を支える資金援助が求められた。後者は主にシンポジウムに参加する若手研究者や発展途上国からの研究者の旅費を援助するというのが最大のねらいで、特にこれまで貢献してこなかったが経済力のある日本とオーストラリアからの援助が期待された。他の IAMAP 委員会のあり方を知らないが、何らかの対応が求められている。

その他、IRC とは何か、という活動案内のパンフレット作りや IRC の歴史をまとめる (J. London) 等の方針が示された。

日本からの委員会は1988年からの山内と、1992年からの中島が務めている。 (山内 恭・中島映至)

ご寄付のお知らせ

第27期常任理事会

1993年12月末に、故内田英治会員の奥様英子様から、故人のご遺志を活かすためにという趣旨で、日本気象学会に50万円のご寄付がございました。

ご寄付の有意義な用途について、1994年2月3日に開催いたしました常任理事会で慎重に検討した結果、故人の日頃のお気持ちにも添うことが出来るということから、「国際学術交流基金」の一部に組み入れさせて頂くことにいたしました。

会員の皆様にご了解頂くよう、ここに報告いたします。